

1. 公害対策

1) 廃棄物に関するガイドライン

キッコーマン環境部では、廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃棄物処理法）に則った適正処理を継続していくため、グループ全体で引用するガイドラインを作成しています。

このガイドラインは、キッコーマングループにおける廃棄物（有価物を含む不要物）の保管から排出・最終処分の完了確認までの基本的な指針を示すもので、廃棄物処理法及び関連法令を順守することに加え、

○法令に基づく判断や対応があいまいになる点

○法令で求められる以上に排出者責任を果たす行動（遵守）について、キッコーマングループの規則として作成しています。

なお、このガイドラインは、定期的な見直しを実施しており、また、関係法令が改正される際には随時改定を行っています。

2) 大気汚染の防止

キッコーマングループでは、硫黄酸化物（SOx）、窒素酸化物（NOx）、ばいじんについて地域ごとに定められた濃度規制、総量規制を順守し、事業所ごとに自主規制基準も設けて排出管理をしています。

具体的な施策としては、低硫黄重油の使用によるSOxの排出量削減、低窒素重油と低NOxバーナー装置の利用、低NOx型ボイラーの設置によるNOxの排出量削減、特A重油切り替えによるばいじんの排出量削減などを行っています。また、ダイオキシンの発生を防止するため、1998年までに焼却炉を全廃しました。その後もダイオキシン発生実態調査を実施し、その都度問題がないことを確認しています。

【キッコーマン食品野田工場の例】

野田工場には、大型ボイラー、小型ボイラー、冷温水ユニットなどの装置が数多く稼動しています。ボイラーの燃料は、特A重油から大部分を天然ガスに切り替え、一部にしょうゆ油を使用しています。

いずれも、性能検査や定期整備を行って維持管理を徹底させています。また、日常的にSOx、NOx、燃料使用量、ばい煙などを監視すると共に、蒸気流量計監視により蒸気使用量を把握しています。さらに、年2回、大気汚染防止法施行規則に基づき、ばい煙等の測定を行っています。

光化学スモッグが発生した時には、

- 第1次処置および第2次処置による燃料使用量の抑制
- 製造部門及び間接部門一時停止による蒸気使用量の抑制
- 大型ボイラーから小型ボイラーへの切り替えによる燃料使用量の抑制
- 燃料流量計監視による燃焼使用量の把握
- 緊急時ばい煙量減少処置報告書による結果報告を行っています。

3) 物流の大気汚染防止努力

総武物流株式会社は、1924年（大正13年）創立以来、キッコーマングループ各社の物流輸送を担当し、物流加工情報システム企業として拡大発展を図ってきました。現在では、「お客様にまごころをお届けする」ことをモットーに、広域物流企業として物流トータルシステムの提案ができるよう、経営力を高める努力を進めています。また、安全・確実・迅速・創意・工夫を行動規範として、経営効率を高めると共に、環境・人・企業の調和を目指しています。

【点検・整備自主基準】

自主基準項目の内、ドライバーが自ら行うのは、月1回の「黒煙」「エアコンガス漏れ」「タイヤ空気圧」チェックで、他項目は、総武物流と『業務委託契約書』を取り交わしている、専門の整備業者に委ねています。

● ドライバーの点検：タイヤの空気圧チェック



総武物流株式会社は、環境保全を目的にした取り組みを行っている運輸事業者として、「グリーン経営認証」（交通エコロジー・モビリティ財団認証）を取得しています。



4) 黒色汚染（黒かび）について

醸造工場を中心とした100～200mの範囲にある建物の屋根や樹木などが、一部黒ずんでくることがあります。これを「黒色汚染」（あるいは、『黒かび』）と言います。この汚れは、水（ときによっては若干の洗剤の併用）で洗浄するときれいに除去できますし、病原性は認められていません。しかし、キッコーマンは、近隣の方々のご意向を重視し、対策を進めています。具体的には、工場周辺の住宅を定期的に訪問してご意見やご要望をお聞きし、被害や苦情があれば、その都度話し合い、原因究明、対策に務め、納得がいただけるように対応しています。

【黒色汚染の原因】

主な原因は黒い色素を生成する『オーレオバシディウム属』が、屋根や壁などに付着して生育するために黒く見えるものです。この菌はエチルアルコールを栄養源として育ちますので、アルコールを含む環境を好んで生育します。

酒、味噌、醤油などの醸造工場では、酵母によってエチルアルコールが作られていますので、この菌が醸造工場周辺で生育することが多くなります。

オーレオバシディウム属は、世界的に、空气中に最も多く普遍的に存在する菌の一種で、北極上空9,000フィート（2,700m）の空气中にさえ多量に存在していたという報告があります。

このように多く浮遊しているにもかかわらず、アレルギーを引き起こす原因となったという報告はありません。また、千葉県衛生研究所、順天堂大医学部、キッコーマン研究開発本部で詳細な試験を実施した結果でも病原性は認められず、安全性に関しては問題ないと考えています。

【キッコーマンにおける対応策】

（1）発生源防止対策

工場から出てくる香気にアルコールが含まれていますので、これが工場の外に洩れないよう、次のように工程と設備の改善に努めています。

- 発生源密閉のクローズド・システムを採用し開放タンクなどはシートで覆っています。
- 工場からの排気ダクトにウォーター・スプレー（水洗浄装置）を設置し、排気中のアルコールを洗浄除去しています。
- 排気ガス中のアルコールを活性炭繊維に吸着し、回収する装置を設置しています。



（2）環境調査

工場内、工場周辺の空気中のエチルアルコール濃度を定期的におよび必要に応じて測定、解析し、改善に役立てています。

キッコーマン食品野田工場製造第1部では、2003年から発酵タンクを開放型タンクから大型密閉型タンクに代えてきました。開放型タンクは2008年から使用を止めました。定期的に工場周辺の大気中アルコール濃度を測定していますが、作業方法の改善も含め、発酵タンクからのアルコール発生をかなり抑えることが出来ました。今後も黒色汚染防止に努めます。

● 密閉型発酵タンク



2012年、キッコーマン食品野田工場の仕込タンク室に、最大60m³/minの空気清浄効果を持つ、排気を水洗浄するアルコール除去装置を設置しました（試運転時に89%の除去率であることを確認しています）。



5) 緊急事態対応訓練

工場で使用している重油や製造・保管しているしょうゆおよび半製品のしょうゆなどが流出すると、周辺の河川の水質を汚濁させる原因となります。キッコーマングループでは、こうした事態に対処するため水質汚染防止には万全の体制を敷いていますが、万が一の発生に備えて、各工場で、それぞれの指示書に従っての緊急事態対応訓練を年1回以上行っています。



● キッコーマングループISO14001:2015一括認証書



2) ISO14001の実践

(1) ISO14001認証更新・維持審査

ISO14001認証取得事業所は、定期的に外部の認証機関によるISO14001認証更新・維持審査を受けるとともに、審査結果の水平展開などを通して事業所間での情報の共有化を進め、さらなる環境マネジメントのレベル向上を図っています。

● ISO14001 認証維持審査

(2025年4月、キッコーマンソイフーズ埼玉工場)



2. ISO14001

1) ISO14001認証取得

キッコーマングループは、環境マネジメントを推進するにあたり、ISO14001国際規格を効果的なツールと考え、1997年5月にキッコーマン野田プラント(現:キッコーマン食品野田工場)で、ISO14001の認証を取得しました。

2011年6月、キッコーマングループの国内主要事業所を対象とするISO14001の一括認証を取得し、環境マネジメント推進体制のより一層の強化を図りました。

また、2017年6月には新しい国際規格(ISO14001:2015)での一括認証を再取得しました。

● ISO14001 認証維持審査

(2025年4月、マンズワイン勝沼ワイナリー)



VI 環境マネジメントの推進

(2) 社内ホームページの開設

近畿事業所は、ISO14001認証取得にあたって出来るだけ業務の負荷を少なく、効率よく推進させるため、社内ホームページを立ち上げました。ここで文書管理を行い、完全ペーパーレス化することにより、社員が意図する書類を画面に開くことが出来るようになりました。

このホームページが活用されるようになり、

- 支社全員への情報発信の一元化と情報共有・教育の徹底
- リンク設定による審査・内部環境監査の効率化
- 紙資源・印刷コストの削減と資料作成工程の削減が実現しました。

キッコーマン東京本社のEMS本部事務局は、環境マネジメントシステム(EMS)の電子化を進め、2015年1月にEMS専用の社内ホームページ「東京本社EMSホームページ」を開設しました。

このホームページ上には、EMS関連文書に加え、東京本社に配属・異動となった従業員向けの環境教育資料や東京本社EMS本部事務局が発行している「東京本社EMS通信」なども収納されており、従業員がいつでも簡単にアクセスし、閲覧、学習することができるように整備されています。この電子化は、EMS活動での紙文書の削減(紙使用量の削減)や廃棄物の削減(紙ごみの削減)にもつながりました。



キッコーマン野田本社も、環境マネジメントシステム(EMS)関連文書の電子化を進め、2016年4月にEMS専用の社内ホームページ「野田本社ISO14001ホームページ」を開設しました。

キッコーマングループの社員は、このホームページにアクセスすることで、野田本社の環境方針や目標・目的、EMS組織体制、環境管理規定、所属ごとの環境側面、関連する環境法規制(一覧)、実施計画とその進捗状況、内部環境監査および認証機関による審査の結果などの報告書類、今後のスケジュールなどを、いつでも簡単に閲覧できるようになりました。



キッコーマン環境部は、2018年3月に社内ホームページ「環境部ホームページ」を開設しました。

このホームページ上には、キッコーマングループの環境憲章(環境理念、行動指針、重点課題)、長期環境ビジョン、中期環境方針や、これに基づいて策定される毎年の環境方針、環境マネジメント組織図、各事業所の公害防止管理者をまとめた一覧表、環境関連法規の改定情報、キッコーマングループ廃棄物ガイドラインや環境ヒヤリハット報告書など、環境マネジメントシステム(EMS)の運用上重要な情報が載せられています。

また、環境部が従業員の環境意識の向上のために発行している環境メールマガジンや過去に開催された「環境講演会」の講演録なども収納されており、従業員が自分の都合のよい時間にアクセスし、環境関連情報を確認、学習することができますように整備されています。

(3) ISO14001内部環境監査員養成講座

キッコーマン環境部では、毎年1回、社外の専門講師を招き、内部環境監査員養成講座を開催しています。受講したキッコーマングループ各社の社員は、環境マネジメントシステム(Environmental Management System(EMS))、ISO14001規格要求事項、内部環境監査などについて学び、新たに内部環境監査員となります。

● 内部環境監査員養成研修 (2025年9月、キッコーマン野田本社)



VI 環境マネジメントの推進

(4) ISO集中講座の開催

キッコーマン環境部では、2022年度、現場でのEMSの具体的な運用をさらに充実させるべく、グループ内企業ごとに内部監査員（および資格取得希望者）を集め、ISO14001:2015の規格に沿った各職場での目標設定、順守義務、成果測定、リスク管理などを具体的に学ぶ、延べ11時間半の集中講座（月2回に分けて5回）を行いました。

調味料を製造するキッコーマンフードテックでは、5月から7月にかけて集中講座が開かれ、4工場から14人が参加しました。同じ製造過程であっても、各工場での具体的な問題点の差が確認され、工場ごとのマニュアル作成や持続可能な仕組み構築の重要性が共有されました。



(5) ISO14001エリアEMS事務局 合同勉強会の開催

2024年度、キッコーマン環境部の社員が講師となり、キッコーマングループ内の各社、各事業所のEMS事務局を対象として、合同勉強会を開催しました。

勉強会の目的は以下の通りです。

1. ISO14001：2015規格要求事項の理解
2. エリアマニュアル・管理規定の理解・確認
3. 参加者間のコミュニケーション強化

● ISO合同勉強会（2024年10月、流山キッコーマン）



● ISO合同勉強会（2024年10月、キッコーマンソイフーズ 岐阜工場）



(6) ISO14001内部監査員力量向上勉強会

2025年度、内部監査における主旨を再認識し、有効な監査を実施するための力量を保持するため、キッコーマングループ内の各社、各事業所の内部監査員を対象として、ISO14001内部監査員力量向上勉強会を開催しました。

キッコーマン環境部の社員によるデモンストレーションを受けて、実践訓練を繰り返すことにより、監査手法の習得、レベルアップを図りました。

● ISO14001内部監査員力量向上勉強会 （2025年9月、キッコーマン野田本社）



VI 環境マネジメントの推進

(7) クロス内部監査の実施

キッコーマングループは、2012年度に、各事業所がISO14001の規格に基づいて実施している内部監査に他事業所の内部監査員が加わる、クロス内部監査を行いました。これは、各事業所間でISO14001推進システムのレベル合わせをすると共に、担当者相互のコミュニケーションを密にすることを目的としたものです。内部監査に新しい視点加わることは、内部監査員の実力や監査業務の質の向上にもつながり、現場でも好評でした。

● クロス内部監査



(8) ISO14001認証未取得会社・事業所の監査

キッコーマングループは、ISO14001認証を取得していない会社・事業所のうち、主な会社・事業所については別途内部環境監査を実施し、環境汚染防止や環境負荷の低減に努めています。

2016年度は、キッコーマン総合病院と総武物流および総武サービスセンターの内部環境監査を実施しました。いずれの会社・事業所でも、環境マネジメントシステムが適切に運用されていました。

● 環境マネジメントシステム (EMS) 監査 (2016年10月、キッコーマン総合病院)



● 現場視察：土のう置き場（緊急事態対応装備品）のチェック (2016年10月、総武物流)



3. 社員への環境教育

キッコーマングループが定期的に行っている社員研修カリキュラムに、環境保全に関する講座を積極的に組み入れることで、グループ全体への環境保全意識の向上を図っています。

1) 新入社員研修

キッコーマン環境部は、定期入社の新人に対して、環境問題の重要性認識、基本的知識の習得を目指した研修を毎年行っています。2025年度も、4月に新入社員に対して研修を行い、環境を巡る地球規模の問題を指摘し、キッコーマングループの環境ビジョン、実行されている施策、そしてその成果を説明しました。

● キッコーマン新入社員研修 (2025年4月、キッコーマン野田本社)



2) 環境メールマガジン

キッコーマン環境部は、2016年6月から、キッコーマングループ社員向けに環境メールマガジンの発行・配信を開始しました。

このメールマガジンは、月1回の発行で、

- ①最近の環境関連ニュース・情報
- ②生活エコ情報：身近でできる省エネ・廃棄物削減・節水活動など

を簡単にまとめたものです。社員一人ひとりが世界での環境政策・活動などに関する知識を深め、環境に対する関心を持ち、日常生活の中で環境配慮・保全意識を持った行動を採るように働きかけることを目的としています。

2023年9月からは、メールマガジンを大幅にリニューアルし、名称も「環境コンパス」と改めました。これまでよりも、フォントを大きく、写真や絵を増やし、内容的にも自社グループ事例も多く紹介し、気軽に読める内容を目指しています。

気候変動をはじめ、私たちがとりまく環境はめまぐるしく変わっており、日々さまざまなトピックが新しく取り上げられています。そんな中、時代の先を読み、進むべき方向をイメージするきっかけにしてほしいという思いを込め、このメールマガには「羅針盤」を意味する「環境コンパス」と名付けました。

● メールマガジン「環境コンパス」



3) 海外視察と従業員への環境教育

キッコーマン環境部は、毎年海外の1地域を選び、地域内にあるキッコーマングループの拠点の巡視や環境関連施設の視察、従業員への環境教育を行っています。

(1) アメリカ地域

2022年9月、キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員および社員が、ブラジルにある生産拠点のKIKKOMAN DO BRASIL INDÚSTRIA E COMÉRCIO DE ALIMENTOS E BEBIDAS LTDA. (KDB：ブラジル) 及び卸売会社のTRADBROS IMPORTACAO E EXPORTACAO LTDAを訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KDBの環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

また、アメリカにあるしょうゆの生産拠点であるKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI：アメリカ) のフォルサム工場、販売会社のKIKKOMAN SALES USA, INC. (KSU：アメリカ)、卸売会社のJFC INTERNATIONAL INC. (JFC：アメリカ) も訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFI工場の環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、従業員に対する環境教育を実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● 2022年9月、KDB(ブラジル)



● 2022年9月、KFI(アメリカ)



VI 環境マネジメントの推進

2025年9月、キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員および社員が、アメリカにあるしょうゆの生産拠点であるKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI：アメリカ)のウォルワース本社工場、マーケットリサーチ会社のKIKKOMAN MARKETING AND PLANNING, INC. (KMP：アメリカ)等を訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFI工場の環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● 海外企業の従業員に対する環境教育 （2025年9月、KMP（アメリカ））



● 環境関連施設の視察 （2025年9月、KFI（アメリカ））



（2）ヨーロッパ地域

キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員と社員が、2024年10月、ヨーロッパにある生産拠点のKIKKOMAN FOODS EUROPE B.V. (KFE：オランダ)を訪問し、

それぞれの担当分野から場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFEの環境保全活動の現状（省エネ、CO₂・廃棄物排出量削減、用水使用量削減など）を調査し、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● 2024年10月、KFE（オランダ）



また、同地域内にあるキッコーマングループの卸・販売会社のKIKKOMAN TRADING EUROPE GmbH (KTE：ドイツ)やJFC INTERNATIONAL (EUROPE) GmbH (JFCEU：ドイツ)なども同時に訪問し、施設の視察を行うとともに、従業員との情報交換や環境教育を実施しました。

● 2024年10月、JFCEU（ドイツ）



（3）アジア地域

キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員と社員は、2018年8月には中国にある生産拠点の昆山統万微生物科技有限公司 (KPPI：中国) および統万珍極食品有限公司 (PKZ：中国)を訪問し、場内の視察と従業員への教育を行いました。

今回の視察では、環境担当の社員は、両工場での環境保全活動の実績（省エネやCO₂排出量削減、廃棄物量削減、用水使用量の削減など）を聞き取り調査した後、場内にある環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管場所など）の視察を行いま

VI 環境マネジメントの推進

した。また、キッコーマングループの環境保全活動情報（直近の活動実績など）を報告することにより、環境情報の共有化に努め、従業員への環境教育も実施し、従業員の環境保全意識の向上を図りました。

● 昆山統万微生物科技有限公司 (KPKI) 従業員に対する教育 (2018年8月)



● 統万珍極食品有限公司 (PKZ) 視察 (2018年8月)



また、同時に、中国にある卸・販売会社の亀甲万（上海）貿易有限公司 (KST：中国) なども訪れ、場内施設の視察を行うとともに、情報交換会や講義を実施し、環境関連情報の共有化と従業員の環境保全意識の向上に努めました。

● 亀甲万(上海)貿易有限公司(KST)従業員に対する教育 (2018年8月)



2023年9月、キッコーマングループの品質、法務、環境分野の担当者が、アジア地域の、しょうゆの生産拠点のひとつである KIKKOMAN (S) PTE LTD (KSP：シンガポール) やコーン製品の生産拠点 SIAM DEL MONTE COMPANY LIMITED (SDM：タイ) の視察を実施しました。両工場の現場を視察しながら、省エネ・廃棄物削減などの取り組みを調査するとともに、従業員に対する環境教育も実施しました。シンガポールでは、KSPが支援した人工池「キング・フィッシャー・レイク」造成プロジェクトの現場（国立公園「ガーデン・バイ・ザ・ベイ」）やマングローブ植樹活動の現場（スンガイ・ブロー湿地保護区）も視察しました。また、シンガポールにあるグループの卸・販売会社の JFC SINGAPORE PTE.LTD.(JFCSG)、KIKKOMAN TRADING ASIA PTE LTD (KTA) や JFC (THAILAND) CO., LTD. (JFCTH：タイ)、DEL MONTE ASIA PTE LTD (DMA) なども訪問しました。

従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● KIKKOMAN (S) PTE LTD (KSP)の従業員に対する環境教育 (2023年9月)



● SIAM DEL MONTE COMPANY LIMITED(SDM)の従業員に対する環境教育 (2023年9月)



4) 環境講演会

キッコーマン環境部は、環境保全に関する従業員向け講座を開催することで、全従業員の環境保全意識の向上に努めています。

VI 環境マネジメントの推進

(1) C.W.ニコル氏講演会

2015年9月、キッコーマン野田本社とキッコーマン東京本社において、長年に渡って環境保全活動に取り組んでおられるC.W.ニコル氏を講師に招き、講演会を開催しました。

● C.W.ニコル氏講演会 (2015年9月、キッコーマン東京本社)



英国ウェールズ出身のC.W.ニコル氏は、1980年から長野県に住み、1995年には日本国籍を取得。「C.W.ニコル・アファンの森財団」を設立して、荒廃していた黒姫の山林の保全に取り組み、自然を回復させた実績をお持ちで、また東北大震災復興支援にも活動を展開しておられます。

講演会では、ニコル氏は、ご自身のこれまでの実体験をユーモアたっぷりに説明され、一人一人がもっと森や水、動植物など、自然の重要性に気づき、深く関わろうとする姿勢を持ってほしいと話されました。

講演会に参加した社員からは、「自然と触れ合うことの大切さがよく分かった」「自然豊かな日本の良さを改めて再認識した」「自分の身近な自然について考え直すきっかけになった」などの意見が寄せられました。

後日、講演内容とキッコーマングループCEOとの対談も掲載した冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 C.W.ニコル氏をお招きして』を制作し、グループ内社員に配布することで、当日参加できなかった社員にもニコル氏の話に触れ、自然の大切さについて考える機会を設けました。

● 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 C.W.ニコル氏をお招きして』



(2) 養老孟司氏講演会

2016年9月、キッコーマン野田本社とキッコーマン東京本社において、養老孟司氏を講師に招き、講演会を開催しました。

● 養老孟司氏講演会 (2016年9月8日、キッコーマン野田本社)



神奈川県鎌倉市生まれ、東京大学名誉教授で解剖学者の養老孟司氏は、ご自身の専門領域を超えて、人間、文化、環境など、広い分野で洞察力のある発言をされておられます。特にご自身で「趣味は昆虫採集」とおっしゃるだけに、昆虫に関する非常に深い造詣をお持ちです。

養老氏は、ご自身の長年に渡る昆虫採集を通して見てきた自然環境の変化に危機感を感じておられることを話され、人間は身体という仕組みを通して自然と深くつながっているのだから、人工物で溢れた都会生活に慣れることなく、暮らしの中で自然を考えることが非常に重要だと説かれました。

講演会に参加した社員からは、「知識・経験豊富な先生のユーモアに富んだ話は、抜群に面白かった」「『環境』の捉え方が、ありきたりな自然科学的なものではなく、先生独特の、哲学的な捉え方で、大変興味深く、とても勉強になった」「先生の『人間自身も自然そのものであり、それゆえに自分と環境に境目がない』との、非常に哲学的な考え方を伺って、自身と環境とのつながりをより強く実感することができた」「ありふれた『自分』『自然』『意識』などの言葉自体についても、いろいろと考え直すきっかけになった」などの意見が寄せられました。

後日、講演内容と、養老氏来社時に催したキッコーマングループCEOとの特別対談の様子とをまとめた冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、養老氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

● 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 養老孟司氏をお招きして ～環境を考える上で大切なこと～』



VI 環境マネジメントの推進

(3) 岸由二氏講演会

2017年9月、キッコーマン野田本社とキッコーマン東京本社において、岸由二氏を講師に招き、講演会を開催しました。

● 岸由二氏講演会

(2017年9月20日、キッコーマン東京本社)



慶應義塾大学名誉教授(進化生態学)、国土交通省河川分科会委員、NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事、NPO法人小網代野外活動調整会議代表理事などをお務めになる岸由二氏は、「雨水が水系に集まる大地の領域」すなわち「流域」の重要性に着目し、『水を、何トンの水とかいうように「モノ」として考えることと、大地に即して流れる「水のカタチ」、すなわち流域としてとらえることとは根本的な違いがある。水を流域的に見れば、水への働きかけも実践的にできるようになる』という考え方から、日本各地で流域全体を視野に入れた治水活動に力を入れておられます。また、流域が持つ多様な自然力を生かして、『それぞれの姿をしっかりと観察して変化を見定め、それぞれの自然力に適した保全活動を推進する』という考え方の下に、三浦半島小網代の森の保全活動を精力的に進めておられます。

約1時間半の講演会では、「流域が育む奇跡の自然：小網代の谷 ～環境を新しい視点から～」と題し、「水を流域として考えることの重要性」「流域全体を考えない治水活動の危うさ」「流域の視点を生かした防災のあり方」「流域を課題に含めていない日本の教育の欠陥」などを具体的に指摘したうえで、「一つの流域の自然力をまるまる保全している小網代の森」の現状を紹介され、『自然は、一律的に「完成した統合的な生態系」などとして安定することはない。自然を保護するには、それぞれの姿をしっかりと観察して変化を見定め、それぞれの自然に適した目的を皆で見定めることが大切である』『人間は、二本の足で大地に登場して以来、地球と深く関わってきた。「人間の手が入らないことが自然だ」ということではなく、「自然にどう手を入れるのか」「どう手入れをすれば合理的か」という視点で自然に向き合うことが大切だ』と説かれました。

お話の中では、たとえば『小網代の森のアカテガニは、森に棲み、海で産卵し、子ガニは干潟で成長する。だから、「この地域には、こんな植物がいるから、その場所を守れ」といった自然界の限られた領域だけで生態系を守ろうとする考え方では、保全はうまくいかない。森・干潟・海をひとつくりにした流域思考で考えることが重要になる』などという分かりや

すい具体例を、いくつも紹介されました。

講演会に参加した社員からは、「体験に基づいたお話でよかった」「岸先生の自然保護活動はアグレッシブで励みになった」「身近な生態系の話から哲学的な話まで非常に興味深かった」「流域思考という考え方は興味がもてた。もっと深く知りたいので本を読みたいと思う」「自然保護と災害の関係性が理解できた」「小網代の森に行って、講演ビデオで拝見したカニを見てみたいと思った」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、岸氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談とをまとめた冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、岸氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

● 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 岸由二氏をお迎えして「流域が育む奇跡の自然：小網代の谷」

(2018年9月12日、キッコーマン東京本社)



(4) 南利幸氏講演会

2018年9月、キッコーマン野田本社およびキッコーマン東京本社において、南利幸氏を講師に招き、環境講演会「気象情報から読み解く異常気象」を開催しました。

● 南利幸氏講演会

(2018年9月13日、キッコーマン野田本社)



南利幸氏は、株式会社南気象予報士事務所の代表取締役。広島大学大学院生物圏科学研究科で気象学を学ばれ、日本気象学会、日本生気象学会、日本花粉学会などに所属、NHK総合テレビ「おはよう日本」やNHKラジオ「かんさい土曜ほっとタイム」などに出演され、気象の解説に取り組んでおられます。

VI 環境マネジメントの推進

- 南利幸氏
(環境講演会(キッコーマン東京本社)にて)



「気象情報から読み解く異常気象」と題した約1時間半の講演で、南氏は「昔の人は『カエルが鳴くと雨が降る』『朝虹は晴れで夕虹は雨』『月が赤く見えると雨』など、身の回りの動植物の活動や出来事などをよく観察し、その変化から天気を予測していた。現在は、最新式の気象衛星と地上での観測データを基に、大型のコンピューターを使って詳細な天気予報ができるようになったが、その一方で、そうした身の回りの動植物を大切にしておよ観察するというのが、感覚的に無くなってきているところは残念に思う」と述べられました。続いて具体的な「天気予報」を題材に、天気図、天気予報用語の意味などをクイズなども交えながら分かりやすく解説されたうえで、最近の気温上昇や集中豪雨などの異常気象に触れ、「天気マークは晴れの表示でも、『ところにより一時雨』などの記載があれば集中豪雨による大災害があり得る」など、異常気象の中での天気予報の見方について注意を呼びかけました。そして、「気温上昇は、これまでの歴史と較べても急速で、たぶん二酸化炭素(CO₂)を大量に放出していることが要因だと思し、それを止めない限りは今後もどんどん上昇していくと考えたほうがよい」「その対処としては、地球レベルで、化石燃料を使わない社会、二酸化炭素(CO₂)をそれほど出さない生活というものを構築していくこと、また一人ひとりの生活レベルでは、これからは何が起こるか分からないということを大前提にして備えることが、それぞれ必要ではないか」と指摘されました。

講演会に参加した社員からは、「テレビで見る南さんが大好きなので、講演が聞けてよかった。トークはユーモアたっぷりで、プレゼン(テーション)力の高さに感銘を受けた」「天気図や降水確率の意味、天気予報のしくみなどがよく理解できた」「気温と環境について考えるよい機会になった」「今年の夏の暑さは凄かった。暮らしに密接な講演内容だったので、家族にも話したいと思った」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、南氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談を掲載した冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、南氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

- 冊子「『豊かな自然を考える講演会』記録 南利幸氏をお迎えして「気象情報から読み解く異常気象」



(5) 河口真理子氏講演会

2019年10月、キッコーマン野田本社およびキッコーマン東京本社において、河口真理子氏を講師に招き、環境講演会「これからの『おいしい記憶』を考える」を開催しました。

- 河口真理子氏講演会
(2019年10月10日、キッコーマン野田本社)



河口真理子氏は、株式会社大和総研・調査本部の研究主幹。一橋大学大学院修士課程で環境経済を学ばれ、環境経営・CSR・ESG投資、エシカル消費などサステナビリティ全般が御専門。アナリスト協会検定会員、早稲田大学非常勤講師、国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン理事、NPO法人・日本サステナブル投資フォーラム共同代表理事、エシカル推進協議会理事、公益財団法人プラン・ジャパン評議員、サステナビリティ日本フォーラム評議委員、WWFジャパン理事、環境省中央環境審議会臨時委員、経済産業省家電リサイクルにかかわる審議会、東京都キャップ&トレード委員会委員などを務めておられます。

VI 環境マネジメントの推進

- 河口真理子氏
(環境講演会(キッコーマン東京本社)にて)



河口氏は、キッコーマングループのコーポレートスローガン「おいしい記憶をつくりたい。(seasoning your life)」になぞらえて「これからの『おいしい記憶』を考える」と題した約1時間半の講演において、「人間の活動は地球の環境容量を超え、生物学的(気候変動問題、砂漠化、水資源・資源の枯渇、生物多様性喪失、海洋生態系の劣化)に、また社会的(貧富の差の拡大、難民・移民問題、奴隷・児童労働、テロ・サイバーテロ)にも、その持続可能性に疑問符が付き、見直しを迫られている。問題に対する危機意識を持ち、バックカスティング思考(目標とする未来を起点に、今何をすべきかを考える未来起点の発想法)で我々の世界を『変革』する事が必要だ。それは、『大きな機会の時』でもある。パリ協定やSDGsなどの世界的な取り組みは、これまでの『経済ファースト』から『地球・社会ファースト』へのパラダイムシフトを目指した活動だ。金融は、これまでの経済主体の行動を規定する価値基準を変える重要な役割を担うだろう」と指摘されました。

講演会に参加した社員からは、「環境問題に対する意識が高まりました。SDGsへの理解も深まりました」「キッコーマンのビジョンを考慮したテーマで良かった。声も通り、分かりやすかった」「現在の環境がいかに危機的な状況かを再認識し、自分にも何ができるか考えるきっかけになった」「ISO14001事務局をやっているので、環境経営に対する意識が高まった」「今回は特に、IRの仕事で投資家と接しているので、一層興味深く聞きました」「環境問題への向き合い方を変えようと思った。環境への配慮と経済的な成長が両立できていない現状は残念です。同じベクトルにするための努力が、ささやかなことでもいいから、出来るようになればと思う」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、河口氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談を掲載した冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、河口氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

- 冊子「『豊かな自然を考える講演会』記録 河口真理子氏
をお迎えしてこれからの『おいしい記憶』を考える」



5) eco検定(環境社会検定試験)®

キッコーマングループでは、社員の「eco検定(環境社会検定試験)®」受験を推奨しており、受験対策の通信教育の受講料の一部を支援しています。

「eco検定®」は、東京商工会議所主催の、環境に関する知識を問う検定試験です。検定試験では、環境問題への取り組みの歴史から、現在地球規模で起きている、複雑化かつ多様化したさまざまな環境問題、持続可能な社会の実現に向けた行動計画、各主体の役割・活動まで、幅広い環境に関する問題が出題され、合格者はエコビープルと認定されます。環境に関する幅広い知識を身につけ、事業活動に「環境」からの視点・意識を盛り込んだ提案・活動・支援ができる人材の育成は、企業の環境経営の推進にとって必要不可欠であり、eco検定®を社員の教育ツールの一つとして活用する企業が増えています。

6) 専門教育

(1) 排水処理施設管理者研修

「排水処理施設管理者研修」は、キッコーマングループの国内主要事業所の排水処理施設管理者を対象とした研修で、毎年、排水処理の専門家から最新の排水処理技術に関するレクチャーを受けています。2024年度は事前学習のeラーニング、対面講習会に加えて、東京都昭島市にある栗田工業株式会社の研究開発拠点「Kurita Innovation Hub(クリタイノベーションハブ)」を訪問し、水と環境に関する最先端の施設を見学しました。

VI 環境マネジメントの推進

- 排水処理施設管理者研修 (2024年7月、
「Kurita Innovation Hub (クリティノベーションハブ)」)



(2) 産業廃棄物管理者研修

「産業廃棄物管理者研修」は、国内主要事業所の廃棄物管理者を対象とした研修で、外部の専門家を講師に迎え、廃棄物の分類、関連法規と排出者責任、収集運搬及び処分業者の選択や委託契約、産業廃棄物管理票や電子マニフェストの取り扱いなど、管理上必要な基本的事項から最新の技術まで、幅広く学ぶことができる内容になっています。研修終了後にはテストを実施し、出席者の習熟度や力量を測っています。

- 産業廃棄物管理者研修
(2024年11月、キッコーマン東京本社)



(3) 営業拠点別廃棄物研修会

2025年8月～11月にかけて、キッコーマングループの国内主要営業拠点向けに廃棄物研修会を実施しました。廃棄物に関する基礎知識や過去に発生した事例をもとにした対応方法などを説明し、各拠点担当者の力量向上を図りました。

- 廃棄物研修会
(2025年9月、キッコーマン九州支社)



- 廃棄物研修会
(2025年9月、キッコーマン近畿支社)



4. グループ内の情報交換

1) 環境関連法令の情報共有

キッコーマン環境部では、法令などの改正に関し、各方面から送られてくる情報や、官報（インターネット）、各種刊行物、講演会、関連団体などを介して知りえた情報を吟味し、簡単な解説を加え、キッコーマングループ内担当者に随時メール発信を行うシステムを整えました。この他、必要な場合には環境保全推進委員会等において解説を行い、法令情報の徹底化を図っています。頻繁に改正が加えられ、担当者個人での緻密なフォローが難しい法令に対して、組織的に対応するシステムとして好評を得ています。

2) 環境ヒヤリハット報告の運用

キッコーマングループがISO14001の一括認証を取得したのを機に、各拠点（事業所）は、環境マネジメント強化を目的に、環境ヒヤリハット報告の運用を開始しました。

「環境ヒヤリハット」とは、企業活動の中に潜んでいる、環境汚染などに結びつく危険性のある事象（それゆえに、心理的にヒヤリとしたり、ハッとしたりした経験）を指します。

2012年度からは、各拠点でこうした「環境ヒヤリハット」事象が発生した場合には、報告の義務付け、事象発生原因の

VI 環境マネジメントの推進

調査、有効な再発防止策の検討、これらの報告書とりまとめ、各拠点への配布によって、環境汚染などの事前抑止力の向上が図られています。

● 環境ヒヤリハット報告書



3) 事業所訪問

キッコーマン環境部では、2012年度より、部員2名がグループ内21事業所の環境管理部署を個別に訪問し、実務管理者を対象に、CO₂削減状況と環境管理状況などの意見交換、環境保全活動の総括と環境関連法規の説明などを始めました。これは、実施現場と統括事務局間とのコミュニケーションを密にし、グループ連携の広がり強化することを目的としたものです。

この活動は、2019年度まで続けられました。

5. 協力会社

1) 取引業者への環境教育

2010年12月、日本デルモンテ群馬工場では、外部の工事業者や輸送業者が工場内で作業を円滑、安全、かつ環境保全に配慮して遂行できるよう、工場構内作業規定などを成文化しました。内容は、工場内への入場や退場の手続き、作業時間、工場資産の保全、服装などを記した「工場内作業規定」と、環境に関する法規制の遵守、緊急事態への対応などを記した「間接影響緩和のための協力依頼事項」からなり、関連業者全てに標準化された構内作業の遂行を求めています。群馬工場では、この規定が正しく順守されるよう、外部業者に規定を渡し、必要に応じて説明を行っています。

● 日本デルモンテ群馬工場



2) 産業廃棄物業者懇談会の開催

キッコーマン環境部では、産業廃棄物処理を委託している業者と、コンプライアンスの共有を目的として、2015年度から懇談会を開催しています。

2021年11月も委託契約を結んでいる大手10社の参加を得て、第4回目の懇談会を開催しました。

席上、キッコーマングループの業務を支える産業廃棄物処理業務の重要性を確認しながら、処理業者の破綻事例をもとに法令順守の重要さと、持続可能な業務契約維持に必要な社内管理の在り方などについて意見交換をしました。



6. 社内評価

1) 環境表彰

キッコーマングループは、2018年度に「環境表彰」制度を新設しました。

これは、各工場・事業所での環境保全活動のうち、

- 省エネルギー対策やCO₂排出量削減策
- 用水使用量の削減や効率化
- 排水基準管理の徹底や処理の効率化や排水水質の向上
- 廃棄物・副産物の削減と再資源化の向上
- 環境配慮型容器・包装の開発
- 環境マネジメントシステム (EMS) の効率的運用と継続的な改善
- 地域・一般社会とのコミュニケーション推進 (環境美化活動など)

などの点で特に目覚しい成果を挙げた活動や注目に値する活動を対象に表彰する制度です。

「第1回 環境表彰」では、各工場・事業所から示された、最近のキッコーマングループの工場・事業所の環境保全活動24件の中から、2019年5月の環境保全推進委員会において、以下の活動が選ばれました。

【最優秀賞】(1活動)

キッコーマン食品野田工場製造第1部「製麺加湿方法の改善」

【優秀賞】(4活動)

流山キッコーマン「排水処理運転方法の改善」

キッコーマングループ近畿事務所「働き方改革による環境負荷の低減」

キッコーマンソイフーズ茨城工場「温水設備の改良、有効利用」

キッコーマンフードテック西日本工場「充填作業改善による資源の有効活用」

【特別賞】(3活動)

埼玉キッコーマン「eco検定®受験で環境意識を向上」

キッコーマン食品東北支社「営業部門における環境に配慮した取り組み」

日本デルモンテ、日本デルモンテアグリ「デルモンテアグリ製品でグリーンカーテン」

6月(環境月間)にキッコーマン野田本社にて表彰式を開催し、受賞した工場・事業所には、キッコーマン常務執行役員CPO(環境担当)から表彰状と盾が授与されました。

- 表彰式「キッコーマン食品野田工場製造第1部(最優秀賞)」
(2019年6月、キッコーマン野田本社)



- 表彰を受けた事業所メンバー
(2019年6月、キッコーマン野田本社)



キッコーマン環境部では、受賞した工場・事業所および活動の詳細を分かりやすくまとめた環境メールマガジン「シグナルe3」を発行することにより、活動情報を全社に水平展開するとともに、キッコーマングループの全従業員が環境保全の重要性を考える機会づくりと環境保全に対する意識向上を図りました。

2022年4月、「第2回環境表彰」が行われました。

2019年4月から2022年3月の間にキッコーマングループ事業所内で行われた環境活動例を対象にしたところ、27件の応募があり、2022年11月29日に開かれた「環境保全推進委員会」で以下の活動が選ばれました。

【最優秀賞】(1活動)

- キッコーマン食品 野田工場製造第1部 製麺G「円型製麺 蒸気量削減」

【優秀賞】(3活動)

- キッコーマンCC部 社会活動G「食のサステナビリティをテーマにした料理講習会を実施」
- キッコーマン食品 野田工場製造第1部 チーム中根「プレートヒーターのCIP洗浄プログラム変更」
- キッコーマンフードテック 西日本工場 製造第1/第2G「設備の容量アップおよび冷却水・洗浄水最適化による用水削減」

VI 環境マネジメントの推進

【優良賞】(3活動)

- キッコーマンフードテック 江戸川工場 エキスG/穀類G/生産管理G「オペレーターのボイラー停止によるCO₂排出量削減」
- キッコーマンソイフーズ岐阜工場 環境保全G「充填室空調機更新による電気使用量及び用水使用量削減」
- 8事業所[SF岐阜工場、総合病院、埼玉キッコーマン、R&D(中央研究所及び醸造開発センター)、野田本社、KF野田工場、KFT中野台、KFE]「電力の100%再エネ活用によるCO₂排出量削減」

【Good Action賞】(2活動)

- キッコーマンクリーンサービス「野田本社の廃棄物削減」
- キッコーマン食品 東北支社仙台営業課加工用G「加工用得意先でのSDGs講習会」

2023年1月11日、キッコーマン野田本社で表彰式が行われ、受賞した工場・事業所に対し、キッコーマン常務執行役員(環境担当)から表彰状と盾が授与されました。

● 表彰式(2023年1月、キッコーマン野田本社)



2) 環境標語

キッコーマングループは、グループ内での「環境を大切にする風土づくり」を推進しており、従業員一人ひとりが環境の重要性を考える「きっかけづくり」のひとつとして、環境月間に当たる2017年6月(毎年6月5日は「環境の日」)に、全従業員を対象に、「環境を大切にしよう」と呼びかける環境標語の募集を実施しました。

合計819件にも上る応募作品の中から、三段階にわたる審査を経て、以下の入選作品14作品が選ばれました。

【最優秀作】(1作品)

温暖化 地球が出した イエローカード
(キッコーマン食品野田工場社員)

【優秀作(特別賞)】(1作品)

100年後 残しておきたい 青い地球(ほし)
(日本デルモンテ群馬工場社員)

【優秀作】(2作品)

むだにしない 意識の量だけ ゴミが減る
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

垂れ流し 知らず知らずに 水の危機
(キッコーマン飲料社員)

【佳作】(10作品)

ムダ省きもっと減らせる廃棄物 こつこつ工夫大きな成果
(キッコーマンビジネスサービス社員)

守りぬこう 日々のエコで 子の未来
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

エコ活動 小さな気遣い 大きな財産
(キッコーマンフードテック本社工場社員)

買う前に 捨てるその時 考えて
(キッコーマン食品新潟支店社員)

あたりまえ? いつもの作業を見直そう
(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

少しでも CO₂CO₂(コソコソ) 削減 私から
(キッコーマンバイオケミファ鴨川プラント社員)

誰かじゃない あなた自身が止める 温暖化
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

高めよう 一人ひとりの エコ意識
(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

限りある 地球の資源 大切に
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

分別で 貴重な資源 再利用
(キッコーマンフードテック本社工場社員)

これらの入選作品は、キッコーマン環境部で発行している「環境メールマガジン」に随時掲載したり、さまざまな環境教育の場面などでも活用し、従業員の環境保全に対する意識向上を図るためのツールとして利用しています。

2021年6月、キッコーマングループは国内全従業員を対象に、環境標語の募集を行いました。これは、全従業員に環境保全の重要性を認識してもらうために2017年に行った募集の第2弾にあたるものです。

応募総数は前回を上回る1028作品。3段階の審査を経て、以下の16作品が入選しました。

【大賞】(1作品)

脱炭素！ 未来につなげる 第一歩

(キッコーマン食品野田工場社員)

【金賞】(6作品)

フードロス 作る責任 廃棄ゼロ

(キッコーマン食品野田工場社員)

これからは サステナブルが あたりまえ

(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

製造者つくる責任最後まで、未来に残そうきれいな地球

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

SDGs 未来に向けた 合言葉

(キッコーマンソイフーズ商品技術開発部社員)

減らそうフードロス つくろうおいしい記憶、

皆で取り組む環境活動

(キッコーマンフードテック西日本工場社員)

いつまでもあると思うな水資源 この一滴を大切に

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

【銀賞】(9作品)

見直そう 買いすぎ 捨てすぎ 作りすぎ

(キッコーマンフードテック江戸川工場社員)

ECO活動 変えるは自分の意識から

(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

環境を 守る一手を あなたから

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

「もったいない！」地球が喜ぶ エコワード

(キッコーマンフードテック社員)

温暖化 地球が発する SOS

(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

今すぐに あなたの変化が 地球を守る

(キッコーマン国際食文化センター社員)

エコ活動 出さない 捨てない 汚さない

(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

どの川も 母なる地球の 大動脈

(キッコーマン食品近畿支社営業部社員)

この先も 自分で守る 水の星

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

8月の表彰式には、受賞者を代表して大賞受賞者が出席し、表彰状と盾が授与されました。



7. 社外評価

キッコーマングループは、社外団体による調査に、積極的に参加し、自社の環境保全活動に対する公平性・客観性の高い評価を得ることにより、自社の活動のより改善・改良へとつなげるように努めています。

1) 日経「SDGs 経営調査」

日本経済新聞社が、日経リサーチの協力を得て1997年から開始した、企業の経営と環境対策との両立性を評価して順位付けを行う日経「環境経営度調査」は、2019年から、企業の

①SDGs戦略・経済価値

②社会価値

③環境価値

④ガバナンス

の計4項目について評価し、格付け（ランキング）を行う日経「SDGs経営調査」に変わりました。

2025年に行われた調査では、キッコーマングループの総合ランキングは「星3.5」（偏差値59.4）でした。内、環境価値については偏差値59.8で、特に、「脱炭素の推進」「温暖化ガスの把握・削減」の指標で高評価を得ました。

2) 東洋経済「CSR 企業ランキング」

CSR（企業の社会的責任）と財務の両面から評価して順位付けした東洋経済「CSR企業ランキング2026年版」では、キッコーマングループの「環境」に関する評価は92.4ポイントで65位でした。CSR全体での総合順位（上場企業）は147位で、食料品業種では6位となりました。

3) CDP

CDPは英国を拠点とし、企業や自治体に、環境問題対策に関して情報開示を求め、また、それを通じてその対策を促すことを主たる活動としている非営利組織です。

キッコーマングループは2025年、「気候変動」「フォレスト」「水セキュリティ」の質問書に回答し、「気候変動」と「水セキュリティ」で最高評価の「Aリスト」に選定されました。

当社がAリストに選定されるのは、「気候変動」では初、「水セキュリティ」では3年連続6回目となります。

また、「フォレスト」は「B」評価となりました。



VI 環境マネジメントの推進

キッコーマン株式会社は、2024年開示サイクルにおけるCDPサプライヤーエンゲージメント評価（SEA）で最高評価のサプライヤーエンゲージメント・リーダーに選定されました。

SEAは、企業が気候変動課題に対してどのように効果的なサプライヤーとの協働を行っているかを評価するもので、「ガバナンス」「目標」「スコープ3排出量」「バリューチェーン・エンゲージメント」が評価対象となっています。



※3 スコープ3：スコープ1、スコープ2以外の間接排出(事業者の活動に関連する他社の排出)



4) SBT イニシアチブの認定を取得

キッコーマングループは、2030年度に向けた当社グループの温室効果ガス削減目標が、産業革命前からの気温上昇を1.5℃に抑えるための科学的根拠に基づいた目標であるとして、国際的な共同団体であるSBT(Science Based Targets) イニシアチブ※1より認定を取得しました。

今回認定を取得したキッコーマングループの温室効果ガス削減目標は、次の通りです。

- スコープ1+2※2：2030年度までに温室効果ガス排出量を2018年度比で50.4%以上削減
- スコープ3※3：2030年度までに温室効果ガス排出量を2018年度比で30%以上削減

キッコーマングループは2030年に向けた環境ビジョン『キッコーマングループ 長期環境ビジョン』を策定し、持続可能な社会の実現に向けて、取り組んでおります。「気候変動」に対しては、2050年のCO₂排出量ネットゼロ実現をめざし、産業革命前からの気温上昇を「1.5℃」に抑える努力を追求するため、2030年までに2018年度比 CO₂排出量50%以上削減達成に向けた取り組みを推進しております。

※1 SBTイニシアチブ：企業の温室効果ガス排出削減目標が、パリ協定が定める水準と整合していることを認定する国際的イニシアチブ

※2 スコープ1：事業者自らによる温室効果ガスの直接排出(燃料の燃焼、工業プロセス)スコープ2：他社から供給された電気、熱・蒸気の使用に伴う間接排出

5)「環境 人づくり企業大賞2020」の優秀賞

キッコーマン株式会社は、環境省が主催する「環境 人づくり企業大賞2020」*において、大企業区分の優秀賞を受賞しました。自然が豊かであることが事業活動と密接に関わっているキッコーマングループが、組織横断的に、環境業務にかかわる研修、講習、啓発、技術支援などの、さまざまな人材育成活動を網羅的に行っていることが評価されました。



*環境省主催「環境 人づくり企業大賞」

「環境 人づくり企業大賞」は、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」第22条の2第2項に基づいて、環境に配慮した企業等活動をリードする人材を育成して輩出し、その活動をバックアップする企業を環境省が表彰するもので、2020年度は7回目の開催となります。表彰対象は、中小企業区分と大企業区分に分けられています。

6) 産業廃棄物事業功労者への感謝状受賞

千葉県には、廃棄物などの発生抑制や資源の循環利用などを通して、循環型社会形成推進に功労のあった個人や組織を表彰する制度があります。令和3年度には、その制度の中の「産業廃棄物関係事業功労者」としてキッコーマン環境部の糸川吉実さんが選ばれ、2022年1月に千葉県環境生活部長から感謝状が授与されました。

感謝状授与には、糸川さんが長きにわたりキッコーマン環境管理業務に従事し、廃棄物の適正処理の実践、グループ各社の再資源化率の向上、廃棄物処理業者の選定、処理施設への現地視察など、排出事業者として廃棄物処理の流れを適正に管理してきたこと、さらに、近年、廃棄物研修会を開催し、廃棄物担当者や若い世代の人材育成に努めるなど、産業廃棄物の適正処理に多大なる貢献をしてきたことが評価されています。



7) 全国農林水産関連企業環境対策協議会 表彰

2024年、キッコーマン株式会社ならびに北海道キッコーマン株式会社は、多年にわたり農林水産関連企業環境対策協議会にあって環境保全の推進活動などに努め、農林水産関連業界の健全な発展に寄与したことにより、感謝状を授与されました。



8) ぎふ脱炭素優良事業者認定

キッコーマンソイフーズ岐阜工場は、岐阜県の条例に基づく温室効果ガス削減評価において、優れた削減実績が認められ、令和7年度「ぎふ脱炭素優良事業者」に認定されました。

本制度は、多量排出事業者に対し削減計画と実績の報告を求め、その取り組みを評価するものです。岐阜工場は、本制度の2021～2024年度の計画期間において、排出量0.5%削減、原単位3.0%削減の目標に対し、排出量20.3%、原単位6.3%削減を達成し、目標を大きく上回る成果をあげました。これらの成果と取り組みが評価され、今回の認定につながりました。

削減の取り組みとして、空調・冷凍機の高効率化や照明のLED化に加え、使用電力は100%再生可能エネルギーへ切り替えています。

また、蒸気・圧縮空気・熱・水のロス低減にも取り組み、エネルギーの有効活用を推進しています。

今後も省エネと再エネ活用を両輪に、脱炭素化に取り組んでまいります。

● 認定式 (2026年2月、岐阜県庁)

